信州川中島合戰

近松門左衛門作

序幕森々たる人品千丈の松の如し。碌々として節多く砢々として目高しと雖。大厦に施す時んば棟梁の功用大いなる哉。勇將は人を見智將は人を知る。是を兼ぬる名將新羅三郎十九代の後胤。甲斐の先生武田大膳太夫晴信入道信玄居士。御世子四郎御曹司勝頼君 オロシヘ家に紫爾の。芽を出せり。地此の度御父信玄の上洛。官位の願ひ成就武運長久の祈り。並びの國信州諏訪明神に參籠あり。寄進の繪馬に珠玉を飾り寫馬。舍人を引つ立て颯ふる狩野が丹青。馬も祈願も懸け奉る御神前。禰宜宮奴は祝詞を繰りて幣帛を。大床に捧げ巫女乙女は裙帶を引いて。透廊に舞奏づる オクリ儀式もへ更に神々し。地勝頼庭上に再拜し。拜殿に上らんとし給へば。執權高坂彈正御袖を扣へ。詞見申せば拜殿に褥を敷き座を構へ候。これ〳〵禰宜衆。あれは此方の爲か但し外の設けなるかと問ひければ。さん候越後の大守。長尾景虎殿の御息女衛門の姫君。地あの松の木陰に春駒書いたる繪馬を上げ。追付け御社參の用意只今。神主方にお休息と申すにつけて傳に聞く。衛門の姫是幸ひに見まほしと思せども。高坂が女中同日の參合せ時節惡しと思ふ氣色。量り兼て在す所に。長尾の家の子直江大和之介時綱。すると〳〵と立出で。詞御遠慮痛み入り候主人景虎願ひありて上京につき。其の祈りとして參詣信玄公にも御上洛とや。定めて同じ御祈り茵も新調。御會釋に及ばず御着座ある樣に仰せ上げられい高坂殿。扨々御丁寧の至り忝し。地此方は遲からず先づ姫君樣より。いや是非とも〳〵其方より。いや何時迄もと辭儀も半ばに衛門の姫。包む人目を洩れ出でてお辭儀のあるは男同士。殊に親御樣と我が身親水と魚とのお因とや。女なれども其の子なれば身を浮き魚の寄邊を頼む。誘ふ水は其方樣いざ拜殿へも一所にと。手を取れば取交す越後縮の雪洒落は。京も及ばぬ手觸りに。勝頼おめず打連れて一つに縋る鉦の緒や。互に見ぬ戀聞く戀の今こそ。諸願成就と神に誓ひの嘯きは。如何なる仇の鰐口もフシいひ探されぬ中ならし。地時に廊門の神人遽しく。詞當國の殿樣村上左衛門義淸公各へ對面あるべきとて。唯今是へと申し上ぐれば勝頼。地應答もむつかし兩人逢うて挨拶あれ。我は何方へぞ外したしと。宣ふ間に村上が馬の嘶く聲。幸ひ此方の姫神主方に寄宿苦しからずば此方へと。思はず知らず案内する。大和之介に乘移り此の仲人や諏訪の神。フシ海より深き緣とかや。地村上左衛門義淸神

前迄道具立てさせ。同荒爾ともせずやァ直江高坂。主達は一國の家老。弓矢の法存ぜずとは云はせぬ。假令道中筋にても他の分國を通るには。先へ使者を以て案内する法。況や當社は我が分内一應の屆もなく踏ん込む慮外至極。地凡そ繪馬は神馬を表する物なるにあれ見よ。信玄乘馬の毛色甲斐の黒駒。馬取りも止め兼ぬる駈馬の勢ひ。必定村上が領分へ馬を入れ。信濃一國押領の威勢を顯す爲な。殊に衛門の姫は親景虎に某所望仕かけ女房同然。然れば直江兄弟は家來分。主從の禮義知らぬかと。いふより堪へぬ若者何々と。直江兄弟を家來とは兄山城守實綱。此の大和之介時綱が事か。我々は越後の國守長尾景虎公ならで。天が下に主君なし。御邊に一粒の扶持は得ず。家來とは推參千萬ま一度いへ。地延びすぎた舌の根切り下けんと。躍り出づるを高坂彈正暫し〳〵。大事の姫君御供我等も若旦那の供。理の非のといふ所でなし平に〳〵と押し鎭め。同案内なく御領内へ立越せしとの御慣り御尤さりながら。使者を以て御案内申さば。道筋帚餘等傳馬以下御馳走仰付けらるゝ。御心遣を遠慮に存じ差扣へ。不念となるは心の外眞平御宥恕下さるべしと。手を束ね慇懃の勝に乘り。ヤァ拔句いふまい勝頼と衛門の姫密通し。某が領内を忍び合ひの宿にせられ。地鼻毛を算まるゝ村上ならず不義者の男女。落居する迄此の義清が預り置き動かせぬ。兩人共に置いて歸れ。身が者ども神主が邸を取卷き。大事の預り者油斷なく警固々々。繪馬踏み割れ叩き破れとひしめく所に。お供の局下女腰元なう情なや姫君樣勝頼樣。何時の間にかは行方知れず床にお文を遺されしと。差出す一通彈正おつ取り懷中すれば直江も仰天。村上いよ〳〵嵩にかゝり扨こそ扨こそ。同神前にて不義の科顯れし。當國の神の利生を見よ。地主を失ひ武士は立つまじ剃りこぼつて願人坊主。鉢ひらけと嘲られ腹に据ゑ兼ね。切つて出づる大和之介を高坂押へて。同武士の立たぬ事ちつともない。地彈正に任されよと野袴の裾高く挾んで身繕ひこれ村上。同姫勝頼兩人は義清が預り置くと。一國の大名の番ひし詞失念はあるまじ。サァ預り者なぜ逃がした何國へ落せし。サァ聞かんサァ言へと地氣のつかぬ所の理窟詰。村上はつと當惑すれば大和之介も力を得。本人の行方隱すは相見にて落せしな。科の元は預り主御兩所の行方知るゝ迄の人質。我が國へ連れ歸るサァ來い歩めとねだりたい程ねだられ。無念々々も盡置ばかり一言の返答なく。大事の科人直江殿いざ繩を掛けまいか。ヲゝ尤と手ぐすね引いたる英雄の面魂。同アゝ鬱憤道理道理。所詮宿したる神主めが不屆。腹癒せには神主始め禰宜めら殘らず。切つてなりとも搦めてなりとも。それに足らずば明神の社壇打毀ちなりとも。地此の義清はぬ〳〵とフシひ捨て歸るも足早なり。地高

坂直江津かに見やり打頷き。一通を拜見すれば。同かね〳〵商人の便りに文を通はし契約の中。義清に紐され恥を見んも口惜しく。暫く影を隱すとの書置。地兩人はつと呆れしがなう直江殿。同申しても兩國守の姫君若君。御一門は廣し家來は多し。土民百姓を賴み給ひても御身を寄せらるゝは自由。御行先に氣遣ひなし。地兎角餘所の領分にて騷ぎ狼狽へ尋ねては。面々主君の恥辱を觸れ廻るに同じ。首尾よく先づ當所を引取り。萬事國境を越しての談合。召具せられし下女下婢お供の旅體亂れぬ樣に御沙汰肝要。此方の供廻り作法正しくはや行列と下知をなし。悠々として立歸る高坂彈正鎗彈正と。名に負ふ武士の一分別名將の家風芳しき。栃檀の林崑崙の石。玉の光の世世永き武田の。家ぞ三皇〳〵類ひなき。地爰も昔の都ぞと名に近江の湖や。言の葉に乘り船に乘り渡る北國七里半。廻船の問丸屋表には駐荷山の如く。濱には數百の船纜ひ。桐の蓋の印立てさせ揃ひの荒夫馳違ひ。同如意が嶽は早お越し。お先手はそれ其所へ。御荷物積んでなぜ舟に坐らないと。地北國訛りの半額額越後の國守長尾殿。滋賀の山越此の津よりフシ御歸國。とこそ知られけれ。大津八町の方より武田信玄の足輕。五十人組の小頭横田兵介問屋の門に大息つぎ。同船支配する家は是な。亭主にはうと呼出し。音にも聞くらん甲斐の國の主今日歸國米原迄船に召されうとの仰せ。新羅明神へ御參詣の爲。三井寺に御休息追付け是へ。大船二十艘小船六十艘。屹度用意申し渡いた急げ〳〵と呼ばはれば。亭主驚き越後の殿樣長尾殿より。先達て仰付られ御覽の如く。浦々の船迄驅集め。外には網船釣船ならで一艘も候はず。地御大儀ながら瀨多へお廻り。今日の船の御用御免と頭を地に着くれば。同身が殿は新編三郎義光公の末孫。清和源氏の嫡々。首尾よく參內院參奈くも大僧正に任官。足利の將軍も御尊敬の筋目。越後の長尾も上洛は召されしが。漸々將軍義輝公の輝の字を貰ひ。景虎を改め輝虎と名乘ればとてをこがましい。先祖は鎌倉の權五郎景政。代々源氏の被官筋。其の輝虎に船を貸し此の港に一艘もないと申されうか。船印おつ奪つて此方の印に立換へろと地どよめく內。輝虎の足輕進藤小平問屋の內より搖ぎ出で。同聞きたくない。武田信玄が大僧正腰拔の坊主官。驕慢の體で身が殿を。信玄が被官船印おつ奪れとは。首がなくても奪られば地奪つて見よと。拔くより早く切掛けたり。ひらりと外し拔合せ口も口腕も腕。駈拔け切拔け受けつ外しつ。命を露塵土砂踏立てフシ一寸去らず挑み合ひ。兩家の先手一時に來かゝりどつと落合ひ。漸く左右に引分け聲々に。同甲州の御家來横田兵介。越後の御家來進藤小平喧嘩。それ御馬留めませい控へませいと呼ばはれば地念かぬ信玄血氣の輝虎逸散に馬乘り進め。兩方鎧踏放し

馬上に式禮下々迄 スエテ列を揃へて跪へり。詞相手ども是へ呼出せ。地畏つたと兩人を連れ出づれば。兩將馬より下り立ち輝虎大聲上げ。詞供先の喧嘩は普く諸家に禁むる所。意趣討ちか時の口論か。品によつて主人と王人の確執となる儀あり。次第眞直に申し分けよとありければ。進藤小平慎んで。事の起りは船諍ひ。長尾の家は權五郎景政の末孫。源氏の被官との悪言堪忍 地罷成りがたく。 斯くの仕合せと申す内より横田兵介。詞信玄が大僧正は腰抜の坊主官と申し。雜口聞かせし無念。御免を蒙り身命果し申したくと。二人が詞有りの儘にぞ訴へける。輝虎呵々と打笑ひ。 お聞きなされ信玄。被官筋が譽れを取り主筋が臆れを取る事もあるべし。武邊は氏系圖によらず。輝虎聊か恥辱とは存ぜぬが。 して何と思召す。仰の如く腰抜の坊主官は愚か。座頭の官でも弓矢の疵には少しもならず。信玄ゆめ〳〵心に掛らずさりながら。足輕體には奇特々々 地拔群の健氣者。彼等が遺恨も晴るゝため進藤小平とやらん申し請け。愚息勝賴が手廻りに使はせたし信玄に賜るまじや。詞ムヽ然らば横田兵介とやらん馬廻りに召使ひ槍一本の用に立てたし。輝虎に下さるまいか。何がさて進ぜいでは。過分過分此方も進上申す。コリヤ〳〵今日より進藤小平。武田の御家來。横田兵介長尾殿の御家人ぞ。地はつと左右に入替り直に目見えの禮儀あり和もあつて。 詞なう武田殿。船數もなき此の濱さぞ御難儀。船中狹くとも暫しの海上いざ御同船申すまいか。仰せなくとも所望の存念祝着と。地船の遺恨の波風立たず スエテ比良の暮雪と打解けて。見やる堅田の落雁と。共に下り居る床几の上。盛將のヲシ會ともいひつべし。地時に信濃の國。村上殿より御使者と輝虎の奏者番披露して。使者は年頃天窓つき粕尾右馨と名乘り。三荷三種の樽肴白銀卷物輝虎の御前に並ぶれば。詞是へ〳〵御口上承らんとぞ仰せける。女馨慎んで。此の度將軍家より輝の一字を御拜領。年來御勳功の印御家の眉目是に過ぎず。從つて御息女衞門姫君。主人義清度々所望致せども御許容なし。年長くる迄緣付き遲き娘は。必ず不義の浮名立つ。後には迎へ取る人なく。一期嬶となるのみならず。親一門の名を下す例。若し左樣の事候ては長尾のお家の瑕。早く義清が妻と定め給へば。世間の人口を塞ぎ且は輝虎公のお爲。御入國を待たず道中迄使者を以て賴みの御祝儀。地目錄の如く進上目出度御受納冀ひ奉ると。口上も終らぬに氣早き輝虎はつたと睨み。詞北陸道に弓矢を取つては。五畿七道に隱れなき長尾輝虎を知らぬか。娘を所望すれども否應の返事せず。契約も定めぬ尾籠至極な。押付けて賴むとは信州の片隅に。輝虎が既にも足らぬ小城持つたると。傲つて我を侮るか。緣付き遲き娘は不義の浮名立ち。親一門の恥辱になるとは人も賴まぬ爲思ひ。我が娘

に不義あれば相手を糺し同罪に行ふ。越後の國風恥を雪ぐに義清は雇はぬ。道中なれば生けて歸す進物持つて疾く歸れ。地誰かある使者め引きずり戻せと。嚙付く樣なる大音聲。荒肝取られ胴顫へどもめいらぬ顏。詞流石大國の大將とも覺えぬ無骨に候。信州に武士多けれども村上が譜代の家老粕尾左蕃。此の音物お氣に入らずば其方より使者を以て返辨あれ。地此の左蕃悄々持つては歸らぬと。立たんとすれば慌い親仁め。それ彼奴に負はせて歸せ承ると。若手の近習大小捩取り翼締め。樽肴進物ども一つに荷造り背中に負はせ。括げ付け〳〵。サア本國へ戻り馬駄賃は主の義清から請取れと。手足を取つて追出せば。詞エヽ無法な主人持つた故。思はぬ面目失うたと。地主のしがからさきに立て。家老の身にて意見せぬ。我が非は見えぬ鏡山 オクリ 面押し。拭ひ逃げ失せけり。地兩家の上下どつと笑へば輝虎も笑壺に入り。なんと武田殿。甲斐越後兩國に挾まれたる信濃の村上。貴殿我等の家風。聞き習ひも致さぬか。扨不作法千萬。さぞ家の自墮落推量致せしと。地詞の下より越後に殘されし。甘糟近江が方より時付の早飛脚。息を切つて輝虎の御前に馳着け。詞去る二十二日衛門の姫君。信州諏訪明神へ御參詣。武田勝頼と密通の戀慕にて。連れて國遠なされ直江大和之介御供より。直に尋ねに出で未だ御在所相知れずと。地飛札を捧ぐる所に甲州の留守居板垣兵衛が方より。飛脚の早打信玄の御前に大息つぎ。詞去る二十二日若君勝頼公。信州諏訪明神へ御參籠。越後の姫君と豫ての戀路。御兩所連れて行方なく。御供の高坂彈正尋ねに罷出づる趣。地委しく是にと差上ぐる兩家の飛札。飛脚の口狀割符を合せし如く。兩將息を詰め給へば。諸武士も御機嫌量り兼ねフシしみ凍つてぞ見えにける。地剛氣の輝虎齒を咬ひしばり。詞緣付遲き娘は必ず不義の惡名立つと。申し越したる村上。此の次第知つたか知らぬか。彼奴が詞にひつしと當つて此の方閉口。地長尾の家の侍大將にも。足らぬ程の村上蕈に非太刀を打たれし輝虎が。一期の無念と面色變じて火の如く。此の恥辱何と雪がんと睨みやつたる信濃路や。頭に上る湯煙は フシ 淺間の嶽かと疑はる。詞信玄勸ぜず。悴勝頼其方の姫は。いふに足らぬ若き者女性。地譽れも恥辱も親と親の間にあり。村上は喧嘩の行司構はぬ事。所詮御分と信玄敵對し人數を調練し。信濃の國を軍の場と定め。雌雄を決し信州はいふに及ばず。詞越後の國をも切取るか甲州を取らるゝか。其の時恥を雪がんに何程の事。地勝負は貴殿と信玄が軍慮の淺深にあるべしと フシ 事もなけに宣へば。詞ヲヽ豫て武田殿に對し。輝虎が弓矢も試みたく望む所。地只今より刄を爭ふ敵と敵。新參の横田兵介是へ來れ 地はつといふより信玄も進藤小平是へ出でよ。詞汝は元輝虎の家來。敵方の首取り始め。ヲ

ヲ汝は元信玄が家人。地軍神の血祭と。兩方兩人一度に拔討ち兩將つゝ立ち。詞サア入魂は是迄重ねて戰場對陣の外。地音信不通の印の盃。献いたヲ、献すぞと提けたる首をかつぱと投合ひ。勇んで別るゝ武士の。矢橋の波の音曽へて関の。聲とぞ三重へ音に聞く。フシ名も山深き。信濃路や岩間は苔に埋れて。雲こそ雲を誘ひ行く。峰には伐木丁々として。谷の水音フシ潺々たり。爰に三州牛窪の浪人。山本勘介晴幸といふ者あり。幼少にて父に離れ母の撫育に人と成り。學ばずして石公孫呉の兵術に通達し。其の名央々と曜れなく。近國他國の大名より招けども。頼むべき主君を選み諸葛臥龍が跡を追ひ。今此の國に影隠す片山人となら柴の。腰に草鎌山枕。フシ暫し世渡る。賤の男の木曾の麻衣袖狭き。草の細道傳ひ行く。フシ爰ぞ桔梗が原とかや。勘介肩に皺を寄せ。地當國信濃は山深く。常に雲は騒けどもやあら心得ぬ今日の雲氣。地南は甲斐に續きて鹽尻峠。北は越後に隣つて烏井が嶽。兩方の頂上より二筋出づる。白雲の。中に當つて亂れ散り宛然軍の。フシ場の如し。察する所甲斐越後兩家の確執疑なし。信玄は良將輝虎は勇將。あら面白の雲の戰ひ。何れ勝つとも負くるとも。主持たぬ身の氣散じと。眺むる空も秋の日の短き煙管取出し。打石の火に立つ煙。淺間をらうに比べつゝフシ煙草に餘念なかりけり。武田四郎勝頼。衛門の姫との浮戯路義清にいひ探され。諏訪明神より立退き爰に迷ひ彼所に隠れ。足も破れて血に染まる茨萱の根小笹原。野路吹く風も追手かと心は先に目は跡に。見返り〳〵衛門の姫勘介にはたと行き當り。ア、御免なりませとエテ悔び驚くばかりなり。詞勘介じろ〳〵尻目にかけ。若い女子若い男水入らずの二人連れ。ム、聞えた。親の極る縁はいや。貴樣ならでと頷き合ひ聟の大事の誂へ饅頭。ほつかり割るは思案の外地野でも山でも此の道〳〵。此方もちやつと柴刈つて饅頭は喰はずとも。嗅が豆茶を黄瓶致そとフシ打過ぐる。勝頼袖を引留め。詞推量に違はず我々は。親の許さぬ妹背の中人目を忍ぶ者なれども。互に妻なし夫なし聊か不義にはあらねども。地脇から邪魔の横戯墓。此の姫を奪ひ取らんとの敵ゆゑに漂泊せり。近頃理なき事ながら夫婦を隠愚得させよかし。武運開かば武士となし今の恩を報ぜんと。生れ付いたる大名風。勘介につこと打笑ひ。詞我とても。胎内から柴刈りではなけれども。斯く荷瘤出來せしは獨りの母に孝の爲。すは奉公望む程ならば。恐らく百貫二百貫の所領は胸に覺えあり。さりながら主取りすれば討死し命を捨て。祿の恩を報ずるが是忠の道。地母孝行とて身をかばへば祿盗人の不忠者。孝を立つれば忠に缺け忠を盡せば不孝となる。此の理に迫つて刀を止め身は山猿となりたれども。母の癡覺めのよき顔ばせ。百萬貫にもフシ替へる

べきか。 頼むとあるに身を引くも孝行ゆゑ。頼み少き浮世とて心短く持ち給ふな。 詞此所は其の昔日本武尊。東夷征伐の御時。一葉を結んで占形とし吉凶を試み。聖蓮開き給ひしより。吉凶の聲を象り桔梗が原と申すなり。 地爰迄落ち延び給ふ事行末目出度き瑞相。 詞此の萱原を左へ行けば越後街道。此の道案内が我等の寸志。ア、千變萬化の浮世やと枕擡げて別れ行く忠孝仁義の武士も。下和が珠の埋れ居てフシ光なきこそ是非なけれ。 地エ、天晴侍かな。大將たる身の じ珍萬寶にも。替へまく欲しきは仁義の武士。家名を問はざる殘念さよいざ先づ敎へし道筋へと。萱踏分けて入り給ふが。屹度思案しなう衞門の前。 詞武藏坊辨慶が。雪中の藁呑逆樣に穿きたる例。今此の草分くる跡に心を付け敵襲ふは必定。 地此の茂りに伏して敵を誑り落ち延びんと。蓬葎を押分くれば萩の本荒下懇れて。幾年經りし猪ののつたりと臥したる形。ア、怖やと衞門の姫スエテ縋り給へば。 詞大事ない〳〵。凄じい猛獸なれど常は人に害せず。疵を受けては手負猪の千人力。さもなき中は彼方から人を怖がる證據。 地狩人を恐れ踞み臥すと覺えたり。我も暫く隱れ家と並び臥猪の萩の床。草引き覆ひ忍ばるゝフシ憂目ぞ戀の習ひなる。村上が郎等落合藤太鐵砲提げ駈來り。あの尾上より見たはたつた今。どつちへ往せたと手々に探す足經ども。こりやこそ爰に足跡あり。功名せんと追つかくる藤太押へて急くな者ども。此の萱原が物臭い試みに鐵砲くれんと。簡先下り打込み突込み二つ三つ玉とう〳〵とう。 詞重ねて響く手答へ。慥に勝頼してやつた。 地いで首取らんと立寄る草葉ざは〳〵〳〵。小山の如く背を持ち上げによつと出でたる手負猪。八幡免せ人違ひ御免御免と逃げ迷ふ。勝頼も姫を圍ひ打物拔いて差向へば。荒れに荒れたる獅子奮迅。眼を怒らし牙をむき。敵も味方も差別なく。巖石鐵壁駈割り〳〵追立つれば。岸踏み外しころ〳〵〳〵。此所の岩蔭彼所の谷。右往左往に逃げ散りしは危。かりける 三重へ次第なり。 道具屋フシはや夕陽の山の端の下枝眞柴刈集め。人の十荷を勘介が一荷にて。立歸る元の道。草踏み散し地を發き山を隔つる人聲の。俄に響くばかりなり。 ナホスム、 地扨は以前の若者敵に出合ひ戰ふか。あゝ心元なやと案じ煩ひ立つたる所に。尾先を廻る猪の。思ひ掛けなき後より左手の太股くわらりと掛け。一振振つたる猪首の力。フシ一丈ばかり跳ね上げたり。 詞勘介痍まず足踏み直し。憎い畜生皮引剝いで蒲團にせん。 地返せ戻せの聲に猛つて一文字。二の身をかはし遣過し。コハリ戻せば開き四五遍惱ましひらりと乘り。左手に尾筒右手に鎌。搔切る肋猪、の血と人の血に。猪の毛變じて猩々緋乘せは付けじと古木にすり付け。 ナホス岩に當つればどうと落ち。上になり下になり半時ばかりぞ 三重

〳〵揉合ひけり。フシ勘介數ヶ所の。地疵の上右の眼を突き潰され。流るゝ血に眼も眩みたゞよふ所を牙にかけ。そこなも知らぬ谷底へ落つると見えしが松が枝に。掛る手先も孝の德。ひらりと取付く早業は フシ木傳ふ猿ともいひつべし。猪は見上げて怒りをなし。木の根を穿つ鼻嵐吹き立てく〳〵。石も砂も一捲り。土を返す勢ひは フシ唐鋤使ふ如くなり。若木の松が根次第に掘れてゆさ〳〵〳〵。大地へどうと着くより早くおつ取りのべ。總身の力腕に入れ擲り立てたる滅多打ち。打たれてたぢ〳〵。弱る平首むんずと締め離なく猪を組留めたり。勝頼すはやと見るより早く駈寄つて。猪の急所を三刀四刀指し貫き。兩手を取つて引立つれば。根氣勞れて正體なし。詞ムヽ道理道理。以前の情今又猪の雷を避け。重々深き恩の人。我こそ武田信玄が一子四郎勝頼。地我は長尾輝虎が娘衛門の前。村上に妨げられ理なき戀路に苦むぞや。親にも勝る命の親心は如何にと宣へば。勘介一眼くわつと見開き。詞扨は兩家の公達かや。某は山本勘介時幸と申す者。輝虎の御家臣直江山城。我が爲に妹聟地かたゞ〳〵緣あるお二人の。恙なきこそ珍重々々。詞村上が領分に片時も猶豫御無用。地早とく〳〵との詞の下。供人引連れ落合藤太あれ遲すなとゞつと來る。ムヽ打揃うて御太儀千萬もう草臥も休まつたり。刀汚しの蠅侍此蠅打喰へと。松の木取つて片足飛び。ひつしひつしと打ち殺せば敗亡敗北大師講の。粥にあらぬ棒喰ひはつと一度に逃げ散つたり。藤太透かさず勝頼やらぬと切りかくる。振り返つてこりやさせぬ靑蠅めと。横に薙ぐれば二つに斷れフシ腸亂れ死してけり。地さあ〳〵敵の根は切つたり。國境迄お供といはんも此の足元。老母も氣遣ひ。御緣もあらば又重ねて隨分御無事で。其方も無事で。さらば。〳〵と二禮のべ。コハリ別れて歸る勘介が。仁は玄德智は孔明勇は關羽に並びなき。譽れは三國名は高き。富士を移して諏訪の不二ナホス御狩の手柄は猪に乘る。それは仁田我は油斷。猪に懸けられ五體不具。缺くれば滿ち。滿つれば缺くる。弓張月や梓弓引くは。片足ちんがちか。跛の根本寃目のいはれは是。此の〳〵。猪を留めたる勘介が譽れを。代々に傳へけり。

第二

地頻繁として三度顧るは天下の謀計とかや。武田信玄大僧正徒士馬廻りを籠に止め。原五郎昌俊一人御供にて。又踏み分くる木曾山陰。降り積む雪に道絶えて山は水晶を植ゑたる如く。林は白銀を粧ふに似て人目もともに埋もるゝ。爰にも住めば住居する。山本勘介晴幸がフシ庵の門に着き給ふ。地原五郎雪中にかしこまり。詞此の寒氣に御馬にも召されず傘もさゝせず。何處へお出でと存ぜしに獵浪人の庵室。もし御用ばし候はゞ君の御成迄もなく。我等引立て參ら

んものを。甲斐の信玄といふ名將。地此の大雪に徒歩跣。慮外ながら餘り褒めた事でもなし。いざお歸りと袖に縋れば振放し。詞何を知つて若輩者。此の勘介は片目跛の小男見掛けは百姓。山賤の如くにて魂は日本の捕。異國の孔明孫吳にも劣らぬ軍者。諸方より招けども。主人の器量に擇り嫌ひして奉公せず。今信玄が軍師に賴まん者。勘介ならで日本に覺えず。地先月兩度此の庵室へ尋ねしかども他行とて對面せず。今日は是非にと志し。麓まで牽かせしは信玄が乘替へにあらず。勘介を乘する馬ぞ。師を求むるは神の惠みを求むるが如し。詞隨分禮儀を亂すな。但し寒くて甚忍なり難くば麓へ下つて誰を替れ。エ、地無氣根者めとやり込められ。是程の雪に何の事と雪に兩足踏込んで。炬燵に煖つて居る樣な豐年の兆やら。今年の雪は暖かなと。いふ唇も紫立ち。フシ齒の根も合はぬ寒さなり。内にも積る。地頭の雪主の老母と思しくて。

詞折り焚く柴の夕煙。地煤る顏も煎じ茶の。フシはな香も澁く聞えけり。ハ、ア地嬉し今日こそは仕畢せたりと戸口に立寄り。詞率爾ながら山本公の御名を慕ひ。先月兩度參りしかども御他行。直に申し談じたく此の大雪を踏み分くる。斯う申すは武田信玄。取次賴み存ずると事を愼み宣へば。ムム武田信玄とは聞き及んだ樣な。足冷えて焚火の許を得離れぬ。地用があらばそこ明けてと。手枕ながらフシあひしらふ。地然らば御免と戸口を開き入り給へば。起きも直らぬ老母の體。原五郎くわつと急き上げ。詞大體人の尋ぬるに挨拶もあるもの。但し枕も上らぬ程蟲でもかぶるか。此の寒氣で寸白でも起つたか。地どれ其の寸白の蟲ひねり殺して本腹させんと。立たんとするを信玄はたと睨付け。詞彼方より呼ばるゝ我にもあらず。押しかけて參るからは辭儀は此方不行儀者。地退り居らうと叱り付け。詞聞きも及び給はん越後の國長尾輝虎と仔細あつて鉢楯の中となり。此の信州を戰場にて近々に輝虎と對陣す。惜しいかな勘介。稀代の才智を空しく山林に朽果てん事殘念至極。地我が師範となり三軍を司り。弓箭の力を助け給はゞ百萬の士卒に優り。信玄が大慶是に過ぎず。萬卒は求め易く一將は求め難く。三たび是迄歩みを運ぶ志。御老母の執成偏に賴み存ずると。師弟の禮儀細かに低頭平身手を束ね。スエテ世にしみ〴〵と述べ給へば。地老母起きも上らず齒の抜けたる口を明け。から〳〵〳〵と打笑ひ。詞ハア物好きな信玄殿やの。此方の息子は幼い時より山家住居。野飼の牛の手綱は取れど。掛鞍に一度腰掛けず。薪の枝は切れども人間の指一本。遂に切つた例もなく。地足は跛で遠道ならず。片目は偏盲で見る事不自由。背小さうて棚な物下すも。間に足らぬ山本勘介。詞軍の大將とはム、〳〵〳〵ア、。此の國の大名衆から抱へたいというて來れど。取りあへ

もしませぬ。其の爲のお出でなら早う歸るがお手柄。地アヽ冷える事やと圍爐裏に踏み出す勘者。原五郎堪り兼ね。詞殿申さぬ事か。ごくに立たぬ素浪人。何も世間の風説。作法知らぬ婆めが子なら知れた〳〵。地サアお歸りと立たんとするを信玄又睨めつけ。詞ムヽ主人の選み給ふと聞き及ぶ。信玄其の器量なければ思ひ掛けし一念。地日の光が月に變り今日が明日。明日が明後日になる迄。主從師弟の契約致さぬ其の内は。信玄が該を此の山に埋むばかりぞと。座を占めて在します賢者を求むる良將の。フシ心遣ひぞ頼ひなき。地老母起上り。扨聞分けないしつこいお方。左程に思召さば事によつて勘介を。奉公に參らせんさりながら。詞鶴は枯木に巣をくはず。大魚は小池に棲まずといふ。勘介を抱へんと思召すからは。此方も主人の御器量を選ばねばならぬ。サア信玄公の軍法。如何なる心を以て兵を用ひ給ふぞや。軍慮の程如何に〳〵と座を打つていひければ。地心得たりと突立ち自在の下に焚き捨てし。榾押しのけて柴の小枝を押折り〳〵。焚き給へば。烈々と燃え上り。茶釜に沸る湯玉の音フシ謹寄する如くなり。地信玄が兵を用ゆる事まつ此の通りと指し給へば。老母横手をはたと打ち天晴大將候よ。詞柔能く剛を制し。弱よく強を制す。黄石公が三略を得給ひし賴もし〳〵。是は奇正の内にも正の軍術。扨心を以てする智謀は如何にと又問ひ掛くれば。地心得たりと外面に出で雪間に餌る村雀。一羽取つて手に握りフシ立ち歸り。如何に老母。我が手の内に雀あり生きたるか死したるか。いうて見られよと宣へば。アヽ天晴稀代の謀計。祖母が生きたりと申さば御手の内にて握り殺して見せ給はん。又死したりと申さば其の儘開きて放さるべし。これ敵によつて轉化し。どちらも外さぬ兩全の謀計。即座の答アヽ名將かな〳〵。一子勘介が主と賴むは信玄公と謹んで一禮し。地いで御目見え申させんと一間に入れば信玄公。夜光の珠を得し如く。五郎も案に相違して。扨もきつい婆めぢやとフシ舌を。卷いてぞ見えにける。地程なく奥より山本勘介御目見え。たそ御取次と呼ばはつて齒朶革縅の絲毛の鎧。搖つて締めたる上帶も二重鎖の小手。脇當。突盛頭の黑塗兜。猪首に着なす片足の。跛ちが〳〵がつくりそつくりフシ凸凹の。地山本勘介晴幸御目見えと畏る。詞原五郎昌俊と申す者。御近付きにと躍り出で名にし負ふ晴幸殿。御目見えの印なうては叶ふまじ。太刀打か槍か扨は立身か。地いざ昌俊お相手と引き立つる腰のよろ〳〵〳〵。重き六具に五體を釣られかつぱと伏して足立たねば。鎧を着てさへ其の臆病。鯨波聞いたら目が暈はう。馬に乘ろより手短かに。棺桶に乘れ勘介とフシ大口明いてぞ笑ひける。地なうさのみ笑ひ給ひそ。詞勘介は此のたび猪に掛けられし疵養生。夫婦連にて箱根の湯元へ

湯治改し。只今内に在り合はせず。主従の御契約。留守と申すも恐れあり。地此の鎧兜は我が子の着用武士の魂。ハテ魂さへ御目見え相済めば勘介も同然と。母が契約詞違へぬ印には。是此の鎧兜を着たる勘介母となど思召されそと。御前に蹲踞へば。原五郎ぐつともいはず。大將信玄御悦び フシ甚だ感じ入り給ふ。詞今より主従三世の契り。安堵の所領三百貫。地子孫に傳ふる弓矢の道。指南頼むとありければ。はつと頭を疊に摺りつけ。五體不具の勘介斯るお主を儲けし事。誠に一眼の龜の浮木ぞや。地武士は何時晴々しき出陣出仕もあらうかと。嗜みの打物衣小袖是御覽ぜと引寄する。破葛籠に疊み込むむ幌衣小旗陣羽織。腕も通さぬ衣々に子を思ふ親の褄辻を。合せて其の身が勘介に。成代つての受け答へ フシ親も親なり子も子なり。地原五郎謹んで。詞雪も頼りに日も傾く。早々御立ちと麓に向ひ。お供参れと呼ばはれば。地お徒士お小姓槍長刀。召馬引馬 フシ雪に嘶えて引立てたり。地とてもの事に勘介も御供申させんと。脱いで差出す突盛頭主従固めの金兜。御手に取つて押戴き渭濱に釣りせし太公望。詞同車に乗せし帝を學び。勘介も馬上にと乗替の鞍壺に。兜を取つて打乗する山形鍬形忍びの緒。結ぶ庵を龍頭。天にも上る心地して地勇んで。甲府へ 三重

衛門姫道行

臨雪を踏んでは花かと惜む岷嶺の。谷水も靜かからで。騒がしき木枯の。山風に散る木の葉まで。追手の聲やらんと後をのみ深山路の奥深く急ぎ フシ行末の。便りなき身の便りには。身に引締めし旅衣。此處や彼處に着古せど生れ付いたる フシ衛門姫。女心の細道も。長地後強しや勝頼の影と我が影四人連れ。憂さも辛さも世の外の。跡に見捨つる桔梗が原。木にも草にも馴れぬれば。散る別れさへ惜まるゝ。あれなう御覽ぜ勝頼公。春の行方を尋ねかね。歌二つ連れたる雁がねの。夫持ち顔に飛び連れて。餘所の嬶に。恥ちよと鳴くは面憎や。フシオクリ好いたへ男と。連れて行く。フシ身には厭はぬ。聲なれど。あな喧し山々の。高根々々を見上ぐれば。スエテ雲の波立つ諏訪の湖。深き情もアゝ在原の。中將なりける豆男。臨戀ゆゑ旅を信濃路や。ナホス淺間が嶽とつらねける。山の煙も我が思ひには。フシ丈も及ばじ。フシ富士の山。雪の肌に花の顔。鹿子斑の。雲の帶。肩に。素縫の。金紗のフシ千鳥。裾野の模様望月の。駒の追風そよ〳〵戰ぐ。歌松の。葉のよな。狭い氣を持ちやんな。廣い。芭蕉葉の。氣を持ちやれトノエ。よしや。辛氣や。其の裏戻せ。廣い。芭蕉葉の世は フシ夢と。覺めては昨日。明けて今日。暮れては明日の月日とも。頼みしかひも越後路も皆 三重故郷と〳〵なし果てゝ同じ浮身の。人心。二つに割らば瓜生坂。江戸重蔵峨々と冬枯れたり。ナホス見え初めしは花の頃。夏の通路足早く

肩へ凉しき夕風に。荻萩薄穂に〳〵出でてナ。さんざらめけば。松蟲。鈴蟲。轡蟲。露も交りてはらりはらり紅葉。土産に秋も井に。氷は厚く我が袖は。碓氷峠の ァシ入日影。暮合近き群鳥。聲はあれども里の名は。問はれずいはず栁取らぬ。ハヅ黒髪。山のァシ宵の闇。ァシ篠を突くなる。吹き降りに雨具は持たず宿はなし。野邊にいぶせき東屋も昔の玉の臺かと立ち寄り。休らひ 三度〳〵給ひける。

地直江大和之介時綱。姫君見えさせ給はぬゆゑ。主君蟬虎の御憤り兄山城へも面伏。本國へも立歸らず若しやと三河遠江。尋ぬる甲斐の限もなき月の入るより降る雨に。案山子の蓑笠身に纏ひ。目指すも知らぬ黒髪山 ァシ上州指して急ぎしが。地鍬は抜ける泊りは遠し雨露凌ぐ木蔭もがなと。此處彼所透し見てこりや何ぢや。詞ヤァ辻堂屈竟々々。木賃入らずの上宿と。地探り寄つたる縁の上旅人と見えし侍の。同じく蓑笠引被り踏み延ばしたる高鼾。詞ム、世界は廣し我に變らぬ憂き旅人。相宿御免と足押しやつて腰打掛け。扨々歩く間は張合ひにて雨も風も身に浸まず。氣が緩む程勞れも出る。吹き放しの辻堂借らうというて蒲團はなし。地斯様の時の用意の酒許由が捨てし瓢簞も。我等が爲の夜着蒲團と。腰に付けたる水飲にだぶ〳〵と一つ請け。詞一簞の食一瓢の飲。これ顔回が樂みと。地一引き二引き惜み飲んだる樂み酒。傍に臥したる侍ましくしゝたる頭を持ち上げ。詞相宿へ辭儀もなく羨りがらする不躾者。地盗んで彼奴に鼻明かせんと。探り寄つたる手先に瓢簞大膽者。口から口へ一刻飲み元の所にそつと置き。空腹入りして臥したるはァシ可笑しくも又野太さよ。地時綱一つさらりと乾し。詞堪らぬ〳〵。自身の押へ最一つと。地取りあぐる瓢簞のひよつこり輕きは不審ながら。注掛くれば雫もなし。詞こりやどうぢや。溢れたか洩つたか吸うて取らんと撫で廻れば。地旅人の息の酒臭さ。ムム扨は此奴と胸ぐら取つて引きずり下し。詞ヤイ鈴盗人は音にて顯れ。酒盗人は臭氣で知る。隱しても隱させぬ。サァ此の瓢簞の酒返せ。いやといへば首が飛ぶ。返答次第眞二つと。刀に手を掛け詰めかくる。ちつとも臆せずハテがいく〳〵と喧しい。飲んだ酒を返せとは法を知らぬ侍殿。酒戻しはせぬ物。地ならば二つにして見よと胴を据ゑたる詞の端。大和之介聞き咎め。詞さいふ和殿は武田の郎黨高坂ではあらざるや。ム、我が名を知りし御邊は如何に。長尾の執權直江大和之介。ヤァ大和殿。高坂殿地是は〳〵と手を取組み。暗がり紛れ危い事。互に息災珍重々々。詞シテ勝頼公の御在所は。されば〳〵東山道を心掛け四五箇國尋ねても。今に於てお行方知れず。假令お二人腐り付いたる御中なりとも。一旦縁を切らせ。兩方引き分けお供して歸らでは。腹を切つても事濟まず。若し御短慮にて御身

を失ひ給はんかと。地いたはしさも先立ち案じ過しがせらるゝと互の憂さを語合ひスエテ落涙するこそ道理なれ。地勝頼夫婦も此の辻堂。宵より臥して在せしが。扨は高坂大和之介我々故に苦勞の旅。逢はゞ緣を切らせんとの詞にはつと胸騷き フシ息を詰めてぞ忍ばるゝ。詞時綱重ねて今日暮前甲州境を過ぎし時。百姓どもが逃げ騷ぎ。甲斐越後確執にて。近々戰爭の御用意と語るもあり。又兩家の不義の名を立てし元の起りは村上義淸。信玄も輝虎も先づ手合せの戰に。義淸を攻め給ふとも取々の風聞。何れにも聞捨て難く一先づ國へ歸る覺悟。慥な沙汰は聞かれずや。ヲヽ某とても慥に實否は聞かねども。夜明け次第本國へ罷立ち。主人と主人の軍に治定すれば。御邊とも敵味方。對談も今宵ばかりもう何時ぞ。八つか七つか雨も降り止む。地あれあれ南の山に雲ちぎれ。くわつと赤きは月日の出づる方角ならず。不思議々々と見る内に。雲を焦せる兵火の光どん〳〵攀く攻太鼓。風に連れたる鬨の聲 フシ耳を突き拔くばかりなり。詞大和突立ち。聞きしに違はず兩家の戰爭と覺ゆるぞ。安閑と見る所でなし。尋ぬる主人は行方知れず。茫然と手振りで國へは歸られまい。今いふ通り主君と主君の戰なれば。地爰は御分と我が戰場こい兩人討果し。高坂が首を土產にするか。時綱が首を土產にやるるか。此の上に分別なし。サア立て勝負といひければ。詞アヽ早まるな時綱。指す敵の義淸を差措き。武田長尾の合戰とは誘ひし。あの火の手は村上が小諸の城の順道。敵の不意を討ち給ふ夜軍と覺えたり。兩人が首よりも村上が首取つて土產にするが近道。地ヲヽさうよ〳〵本道は廻り遠し。直に打てば一里餘り。戰爭果てゝは詮ない事。いざ行くまいか尤々。時刻移すな時綱まつかせ暗いぞ。山坂高坂。合點ちや。サアこいやつと。踏んだる足は阿吽の二天 フシ飛ぶが如くに駈けて行く。跡には夫婦。悄然と。身を悔みたるかこち泣き稍あつて勝頼。詞病は少し癒ゆるより起り。孝は少艾より劣るとは。ひつしと胸に思ひ知る。我が愛着に親親を修羅に導く不孝の大逆。あれ見よ子故に怒る瞋恚の兵火。勝頼程の者が色に迷ひ民百姓の苦みを。餘所に見んも本意ならず。爰に父の目はなくとも月日は父の兩眼。父と父とは合戰し子と子は妹背の語らひは。天の照覽恐ろしく。詞義を見てせざるは勇みなし是より夫婦引別れ。今迄積みし惡惡の非を改むれば。孝も立ち義も立つ。地互に心殘れども御身も輝虎の娘。輪廻の詞無用ぞと。すけ無くいへど目は涙。泣き崩をれて衞門の姫。せつなき戀を義に替へて添はれぬとの御詞。理なり フシさりながら。地親と親との戰やら村上との軍やら。誰が知らして誰か知る。父の軍に極まらば。詞成程添ふまい思ひ切らう。若し義淸退治の上。互のお心打ち解け和談あるま

い物でもなし。添ふか添はぬか緣を切るか切らぬか。堺は夜明けて知るゝ事。地それ、迄は變らぬ女夫。なんほ不孝になるとても。半時や一時の眼離はない。何かなしに莞爾と互に倦く程しめ合うて覺悟させてと抱き付く。地エ、時も時折も折末練至極と突放せば又取り付き。地彼方へ退けば此方へ慕ひ。縺るる袖に引かるゝ心。未練々々も戀慕の闇未來を照らす辻堂も妹背の臺と三重へ成りにけり。地既に五更の一點の鐘に落ち來る村上義淸。武田長尾の兩勢無二無三に切り立つれば。太刀も兜も打落され身に添ふ物は旗差一人。轉つのめつゝ泥塗れ命からぐ〳〵逃け延びて。溜息をほつとつぎ。詞エ、無念口惜しし信玄輝虎中違はせ。彼の鷸蚌の戰ひにて兩國を攫まんと。日頃の巧みぐわらりと違ひ。却つて彼奴に夜討せられ。家來を討たせ城を拔かれ。おめおめと存らふるも命が物種。此の恥辱を取り返す一つの計略能く聞け。信玄が領分は海邊なき國なれば。遠州鹽の運送にて諸人の喉を潤す。我遠州の氏直には豫て入魂所緣もあり。氏直に手を束ね賴み入り。鹽の手をとむる物ならば。地鹽に飢ゑて甲斐一國は戰はずして墜。信玄坊主めしてやれば輝虎討つは手間入らず。三ケ國を横領し戀の敵勝賴めゝ。搜し出して寸斷々々切り。詞衝門の前をぬつくりと抱いて。地寢るは案の内。何と思案はあるものかと語る後に聲をかけ。勝賴是にと切りかくる悲しや伏勢やれ逃げよと。一度の懲に二度の恥。投ぐる刀に家來が首。飛ぶより早く村上義淸ふはふ〳〵通れ落ち失せたり。地何處迄もと、駈行く袂に縋りつき。詞アノ臆病な村上何時殺さうとまゝな事。此の暗いに大事のお身怪我遊ばすな。何と私が申さぬ事か。今宵の軍は義淸退治に極つた。地アヽ嬉しや如何か斯樣かと幾瀨の思ひの痞も下り。落ち付きましたといふ折しも又改まる太鼓の調子。兵火燃んに數千の鐵砲。胸にこたへて勝賴持つたる刀がはと捨て。詞あれこそ父と父との軍今が夫婦の別れぞと。地心亂れて立騷ぐ姫も驚くおろ〳〵聲。何のさうではあるまいとフシ離れかたなく付き纏ふ。山間にちら〳〵と焰に映る旗の手の。色も定かに分らねば。延び上り飛び上り。氣も逆立ちし心の闇の黑髮山。夫が上れば續いて上り。焰は下に見下せども一天暗き眞の闇。旗の文色も見えざれば。未だ日は出ぬか明けよ〳〵と明くるを惜む氣。惜まぬ氣。詞エ、如何に男なればとて餘りな思ひ切り。夜が明け旗の印も見え。兩家の軍に極れば添ふ事ならぬ身の上に。地夜が明けよとは胴慾な。今宵一夜を千萬年。日天樣のお慈悲に。出て下さるな夜も明くなとわつと叫び。伏し轉び歎くに。辛き東雲や。コハリ萬里を隔つる東海の。波に陽炎騰々と。たなびき渡る雲の白旗幸菱。ナボス地あれこそ父よ武田の紋ハア。此方に焦る、旗紋は緣切る桐の臺南無三寶。長き別れは長

尾の族。彼方の戰び此方の恩ひ。泣き明かしたる目も眞赤に出づる日の。コハリ五色八色染むる フシそら〳〵。雲の波騎々嘶々たる太陽の。歩行は五萬六千里。夫嬬が間も幾千里。明けてはかなき夜床の霜朝日に。連れて別れける。

第三

項 葉公龍を好んで畫き刻めども。眞の天龍を見て魂を失ふ。是龍を好むにあらず。龍に似て龍にあらざる物を好むといはん。將の賢士を好む賢に似て賢にあらず。少い哉才賢の臣。然れば長尾輝虎。信玄と初度の合戰に勝利を失ひ本城に勢を引入れ。執權直江山城守實綱。甘糟柿崎宇佐美なんど。侍大將召集め。 問今度の戰爭味方三萬の人數を以て。武田が一萬二千に駈け崩され。 項無念の敗北骨髓に徹す。日頃危き勝を好まぬ信玄。朝霧の紛れに大河を渡し。切所の細道より我が族本の後へ押し廻し。無二無三に駈け破りし武略の鋭さ。信玄が胸中より出づべからず。如何なる軍師が敵に與し斯る奇計をなしけるぞ。汝等聞かずや知らずやと眉毛逆立て眼に角。以ての外のッシ不機嫌なり。甘糟柿崎詞を揃へ。 問我々も其の心付き間者を入れて窺ひ聞き候へば。山本勘介晴幸と申す浪人を召抱へ。偏陣取士卒の駈引。一向勘介が下知と承ると申しも敢ぬに。ムゥ昔に聞く勘介。則ち直江が女房の兄ならずや。ヤィ山城。近き緣者の身にてなぜ我に勸めず。何と油斷して敵には取られし。信玄が千石くれば二千石。三千石やらば六千石。 項五千石ならば我一萬石もくれんずもの。我が家を見限りしか。但し此の輝虎勘介が主に不足なるか。所存あらば言へ聞かんと フシ顏色。急いて見えにける。 項直江少しも驚かず。 問御意なくとも申し上げんと存ずる所。尤彼が妹を相具し候へども。勘介には未だ對面致さず。 項在鄕に引込み鋤鍬取つて自ら耕し。秋の田面の月に嘯き。薪を荷うて山路の花を友とし。世を詔はず祿を貪らず。天命を樂み義を堅く守る士。越後半國賜るとて。傳緣引を力に知行を望む勘介ならず。 問憚りながら君御短慮高慢にて。人に詞を下け謙ること御嫌ひ。世の中八分に見下し。思ふ樣に知行さへやらば。樊噲張良でも抱へて見せんとの思召とは大きに相違。今度武田方になりたるは。必定信玄が上手を盡して招きたるに疑ひなし。某も餘りに殘念枕を割りし一手段。 項短氣を鎭め無念を押ゆる御合點ならば。密々に申上ぐべしと恐るゝ方なく申しければ。さしもの輝虎理に服しほく〳〵頷き。座敷を屹と見渡せば。甘糟始め物大將 フシ殘らず御前を立ちにける。 項輝虎色を和け給ひ。 問これ實綱。智ある軍師を親師匠とも貴ぶは古の法。勘介我に奉公せば。弓矢八幡驕を持たせても堪忍する。おことが思案は何と〳〵。さん候勘介幼少にて父に離れ。七十に餘る老母に孝心深く。廿四孝の追加と沙汰に乘

る孝行者。先づ母を齣けん爲。地女ども方より迎ひを立てさせ候と申す所に。直江が妻の唐衣遣戸口に差伺ひ。詞なう山城殿。母樣先程お着き。兄勘介殿の內儀樣も同道。地指圖の通り直に御城へ乘物入れさせ。お次の臺子の間に憩ませ置きしと。聞くより輝虎出來た〳〵。具に聞きたし是へ〳〵。御免ある近う參れと呼出し。詞シテ母は年寄られしか。機嫌はよいかと問ひければ。長浪人の辛苦にや腰は二重天窓は雪。地十も老けて見えながら行儀作法は昔に變らず。勘介殿の御內儀。お勝樣にも始めて逢ひしが尋常な氣高い嫂御。詞一つの疵は口が吃で物いふ事も恥かしがり。請返答は皆筆先。其の上琴の上琴筆にも書かれぬ愈な時は。いふ事に節を付け琴に乘せ謠へば。如何樣の早い事も吃らずにいはるゝと母樣の物語り。地其の手の見事さ墨付筆勢。御家中の祐筆衆にも少い程の器用人。吃りが直して進ぜたいと。語れば直江一段々々。隨分母の機嫌を取り。何時迄も逗留ある樣に待遇せ。さぞ老體の草臥れ。是へ請じ此の御座所に直して馳走々々。殿と我とは障子の蔭にて事の樣を計らひ。首尾を見合せ對面せんと フシ主從伴ひ入りにけり。折しも床の。大和琴。硯料紙も座敷に並べ。唐衣廊下の欄干に手を掛け。詞山本勘介殿の內儀樣。母御前連れまし是へお通り。地山本殿勘介殿の內儀樣母樣と。招待の聲聞ゆれば。音高し〳〵 フシ塀を出でし。老の鶴。子に逢ふ迄ぞ世の人の。問ふとも我は フシ名なし烏。名を洩さんはをこがましなう唐衣。詞此の越後は勘介が主君。信玄公の敵の國。和女の夫は敵の御家老。其所へ此の母が來る義理はなけれども。地此の世の名殘に母の顏見たしとの文の面。詞我も娘戀しさ迎ひと打連れ。地言舌廻らぬ嫁を力に下女も連れぬ此の有樣。山本勘介殿の。母よ內儀よと聲高にはいはぬ事。ヤアゑいと坐せんとするを手を取つて。直に是へと請ぜられ嫁のお勝が携へし。持刀膝に引寄せ怯めず場うてぬ白書院。繪物したる褥の上 フシ威も偏つて見えにける。唐衣近く差寄つて。詞お禮申すはお勝樣。私が孝行をお一人に振掛け。年寄の起臥朝夕の御介抱。地此の度の道中雨につけ風につけ。山より川よ嘸お氣壺し。詞には申し盡されず。いひかける程口籠り。只あい〳〵と笑顏ばかりを愛想にて。硯引寄せ赤らむ顏のはぢ紅葉。木の葉の時雨さら〳〵〳〵。世尊寺樣の走書讀手の フシ辯に讀め易き。唐衣取上げア、〳〵是は忝い。お筆の通り姉となりとも妹となりとも。姉妹と思召しお心隔てず賴みます。詞扨此の御手跡わいの。存ぜぬ乍ら見事々々。地此の半分どうぞ書きたい事やと。くる〳〵卷いて袖に納むる後より。直江裝束改め。狂紋の綾の吳服一重。肩にかけて立出で式代深く。詞拙者直江山城守實綱。お國元へ罷越し。親子の禮儀申し上ぐべき所。女どもより迎を參

らせ。遠路の御光駕祝着是に過ぎず。山本氏の御内室にもよくぞ〳〵御同道。お心易く御逗留ある樣に。態と御馳走は申さず。從つて此の小袖は。將軍義輝公のお着衣。二つ引兩の御紋付主人輝虎拜領致され。一兩度着せられしばかり。當國は寒國假睡の裾に置き給はば。輝虎も滿足たるべしと差出せば。起き直り莞爾と笑ひ。ヤレ〳〵。數ならぬ此の婆が來た事輝虎公のお耳へ入りしよの。扨は妥は聟殿の館かと思へば。御主人の本丸か。シテ此の小袖を婆に着よとかホウ御念の入つた事やの。扨々々。結構な狂紋の綾といふ物か。流石將軍のお召料。さりながら。輝虎殿が一兩度も着給ふとあるからは輝虎の古着。此の婆は此の年迄。人の古着貰うて着た事がない。地なういやゝ忌々しいと。詞に綾も艶もなく。吳服もフシ色を失へり。回いや申し。母御に召せとは御挨拶。もと是は男模樣。勘介殿の土產になされよとの志。いや〳〵〳〵。武田信玄といふ主持つて何乏からぬ勘介。土產には越後の名物鮭の鹽引。歸るさの道には木曾川の鮎の白干。信濃梅の梅干。皺のよつた此の顏の無事を見せるが土產ぢや。地テ、喧しや聟殿御免と足踏延し臂枕。直江も立つに立場なく勝手に向ひ手を叩き。たそ參れ〳〵。御時分がよし料理々々何として遲なはる。料理人め屹と申付けんと。料理を其の座の機にして母の機嫌の鹽梅加減オクリ窺ひへ〳〵フシ立ちにける。程なく御勝手よしとほのめき。本膳の懸盤に種々の魚鳥。珍物の野菜美味を調へ。配膳の侍直垂繕ひ作法正しき燈觸り。御膳召上げらるべしと烏帽子八分にフシ差上げ。てこそ控へけれ。唐衣見れば主君輝虎公。はつと驚き是は恐れ冥加ないと。いはんとせしが仔細こそあらめと。なう母樣。御膳々々といふ聲に起き直り座を組めば。管領風の摺足にて膳の据振り敬ひ深く。通ひの座に手を突き。回遠國の儀御馳走も心ばかり。召上られ下さるべしとぞ仰せける。老母會釋し。ホウ隔心がましい饗應。殊に仰山な神前に御供供ゆるやうに。烏帽子直垂の配膳は。近習衆か外樣衆か。常々女子どもに給仕さする此の婆。齒は拔ける口も乾く。慇懃な給仕では窮屈で喰べにくい。勝手へ立つて休息めされ。唐衣代れやとありければ。いや辭儀は却つて迷惑。子息の山本勘介殿。勇といひ智といひ。楠正成が再來とも謂つべき弓取。惜いかな武田信玄に奉公とは玉を泥に擲ち。麒麟を繫いで犬とすぢ如し。斯る英雄の御老母。地直江山城内緣を以て。不思議の御出で一國に優曇華の咲いたる喜。回今日より我も母と頼み子となる證の。盃頂戴の望。かう申すは長尾彈正の少弱輝虎。地孝行始の給仕配膳と烏帽子を疊に着け給へば。嫁も娘もはつとばかりスエテ覺えず。頭を下げにける。老母膝を立直しけら〳〵と高笑。回ハテ、長生すれば珍しい事を見聞くよな。鎌倉の海には鹿の

角で鰹釣。攝津河の淵には麥飯で鯉を釣ると聞きしが。越後の國には老いさらほひし此の婆を餌にして。山本勘介を釣り寄せんとはハ、〳〵〳〵事可笑しや〳〵。凡そ大將は天より受けたる明命を顧み。正直自然の矩規を外さねば。天の時地の利に適ひ。諸卒是に和し遂には誠の勝利を得る。總じて物には相應あり。此の婆が給仕には腰元女の童が丁度相應。地鷄を割くに焉んぞ牛の刀を用ひんとは聖人の誡。人を喰す僞表裏今日の振舞に顯れ。本心曲つた釣針に。釣らるゝ勘介ではおじやらしませぬわいの。此の膳部に手をも掛けては思になる。輝虎殿と敵對の勘介が母。敵の恩を受けては我が子の鉾先に緩みが付く。義もなく勇もなき此の膳何にせんとずんど立つて。懸盤がわらりと蹴返せば。膳部亂れてひつた直垂。膝に味噌汁淵をなし。魚より驚く嫁娘ハア〳〵ハアと。フシ肝を冷して惘れ居る。地短慮の輝虎くわつと急上げ。怒小袖を吳るれば古着なんどと蔑視し。剩へ天子將軍にも給仕致さぬ虎輝が据ゑたる膳を。地膳に掛けて踏みちらす粗略。狂人同然と思へども堪忍ならず。簸首刎ねんと重代の小豆長光。三尺五寸に手を掛け給ふを。直江山城飛んで出で御手に縋れば。唐衣母に取付きお詫〳〵と心を揉む。何の詫言。聟の主人手向ひもせず詫もせぬ。サア手に掛らん〳〵と刀をかい込み立つたる擬勢。ヲヽ其の喉止めん放せ直江。これ〳〵〳〵。膳を持たせても堪忍するとの御誓言は何と。禮儀は爰と制しても。スエテ身を慎はして無念の涙。中にうろ〳〵嫂が。心急く程口廻らず拜んで廻りつ立つつ居つ。詮方なく〳〵涙片手に琴引き寄せ。琴柱を律に調べ替へ。歌兎し給へ老の身の。相ノ山力に。足らぬ。吃りの。不具者を頼みに。預けしは我が夫。掛預かるは姑。歌かひなく爰に捨草の。露より脆き。命をや。空しく枯れし籬木を。無常の煙となし果て。一人悄々。歸るさは。相ノ山拾ひし骨の。供をして夫には。何と語らん。ナホス地代りには我が命母を助けたび給へ。お慈悲ぞやお情とわつと叫び。彈き捨ての琴に。身を投げ伏し沈む。鬼を欺く輝虎も哀れに心の緩むを見て。直江押取りアヽ御免あるぞ女ども。母を誘ひ我が館へ〳〵。ハアヽ有難しと一禮に。お勝が嬉しさ物いひたげに。頭を振るばかり足もつかず踊節。歌情の花のヤレ御所櫻。枝はゑゝゑつちりな。ゑゝゑつちりな。ナホス ゑつちり越後の御繁昌と祝ひ。勇みて三重〳〵日を送る。フシ北國の。爰にも己が時知りて。是より北の故郷を。慕ひてこそは歸る雁。況て老の身の今日歸る明日歸ると。怠へせいなき老母の心。隨分慰め止めよと殿の仰。御家老の姑女御前家中重んじ。毎日の進物四季草木の造り花。屏風掛物歌書物語或は嚊る籠のとり〴〵。奥立關の取次に所狹きまで積重ね。高田の局が披露にて

女房達の取り捌き。表使の進物帳 フシ 筆を摑く際はなし。 地 時に信濃堺の番所より早便到來し。 詞 今朝未明右の目は畸。左の足跛の侍御關所を通り候故。何方より何方へ行く人と名を尋ね候へば。甲州山本勘介といふ者。御家老直江山城殿の御内證へ行くと申し。供の人馬をお國堺に殘して通られし故。 地 脇道より遯つて先づお知らせと申し フシ 置いてぞ歸りける。 地 局手を打ち是は目出度い。山本勘介様とはお客人様の御總領。則ち奥様の兄御様。申上げたら嘸お悦び其の間に腰元來。お座敷綺麗に掃除しやと。 フシ いひ付け奥に入りければ。 地 手々に雜巾とりの羽箒棕櫚箒。掃いつ拭うつ立騒ぎ。 詞 なうお大知つてか。勘介様は奥にござるお勝様のお連合ひ。隱れもない軍法者功の武士なれど。片目畸に跛跛ぢやけな。此方は吃り何と思やる。お寢間の睦言が不自由にはあるまいか。アヽ何のいの乞りで物がいはれいでも。 地 肝腎の時はッふん〳〵で濟む事。男は氣轉で畸は愚か。兩方見えぬ眞の闇にも。夜軍の早業は手ばしかい。一番乘りに フシ 抜け目はないとぞ笑ひける。 地 上臺所に局が聲奥様お城へお上り。板の間へお乘物廻しや。お供の衆とざめき裏門開く音して。高田の局立ち出で。 詞 これ何れも。旦那様今朝よりお城にお詰めなさるゝ。御相談の事にて奥様も今御登城。御夫婦御城よりお下りなき中。勘介様お出でなさるゝとも。必ず〳〵母御様お勝様へは先づ沙汰なし。 地 此所でお茶あけ御菓子などで。御馳走致せとの仰せなりといふ所に。山本勘介様御出でと。小取次の撫子が案内にて。旅裝束の裁着に膝は捻れてちんがちが。左跛跛に右畸。雪折松に星一つ。葉越しに見ゆる男振り フシ 座敷に直れば。 地 女房達ふつと噴き出す可笑しさを。エヘン〳〵に紛らしてお次へ笑ひに立つもあり。御茶小姓がくつ〳〵〳〵乞りで物がいはれいでも。手を震はして茶碗の臺。フシ 溢れたゆたふばかりなり。 地 細瑾を顧みぬ大丈夫。笑ふも謗るも詞無。もなく。 詞 其方は局か。山城殿の御内室慶衣に。身が來た通り取次頼むとありければ。ハア公用につき夫婦ともに登城。未だ城より下られず。 地 先づ此所で御休息それお煙草盆。お菓子〳〵とあひしらふ。 詞 ムヽ公用ならば歸りの程も知れまじ。山州夫婦に用はおりない。老母の氣色以ての外との便りに驚き。夜を日に繼いで罷越す。 地 早く母の顔見たし案内頼む。罷り通ると立たんとすいや申し。 詞 お袋様は一段と御機嫌よく。爰許へ御越しなされてより嘸一つ遊ばさず。 地 御家中の持て囃し毎日花の鳥のと。數々の慰みといふ程氣遣ひ。 詞 然らば女房勝に逢ひ申そ。いやお勝様も御機嫌ようお袋様のお傍に。追付け御夫婦お下りに間もあるまじ。 地 それお風呂急がしや少しお休みなさるゝ爲お枕上げましや。ハほんに氣が付かなんだ。お慰みに御酒上げましよと オクリ 殘らず。立つて入り

ければ。地座敷には客人一人とほんとして手持わるく。詞ハテ心得ぬ屋敷の體。地母の大病十死一生只今の命も知れずと。女どもが自筆の文見るより前後辨へず駈着けしに。病人ある體とも見えず母は一段機嫌よしとて。女どもに逢はせず。殊に公用につき山城が夫婦連れにて城へ上るとは。輝虎程の大將が女まじりに國の仕置き。軍評定するでもあるまじ。是ぞ不審の第一。詞ム、ウムウ〳〵今氣がついた。母を囮にかけて此の勘介を。味方に招き取る談合饋に掛けたる如し。血を分けし妹なれども夫を持つては夫の爲。主の爲を思ふ唐衣めは尤至極。大阿呆は女房の吃りめ。地輝虎の智略にて母を馳走し。一家中尊敬するに心奪はれ山城にたらし込まれ。息災なる母を萬事限りとの文を以て。我を釣寄せまんまと敵國の袋へ入れしよな。エ、後悔千萬一應も再應も念入る筈の事。母の生顔ま一度見たし拜みたしと思ふより外他念を失ひ。ふか〳〵と踏み出せし勘介が一生の龜忽後代の笑草。いや〳〵片時も止る所でなし。母を奪取り立ち退いて鼻明かせんと立ちあがり。見やれば奥に間數も多く案内知らず。門を出て後の塀をや乘るべき。サア一代の難所我が爲の鐵拐が嶽鵯越。心の山坂跛馬行きつ。戻つつ思案最中ッシ誰が知らせてや。地女房お勝走り出で。コ、ッ斯うとばかりに取りつく所を。物をもいはず後樣にはたと突きのけ駈け出づる。又引きとめて詞ナアナ、、ナアなんん何とウ、ウロ〳〵〳〵ウ、狼狽でござつた口こそ叶はね。コ、ッ此方のニョウによん女房。勝が預つて來たからは氣遣ひちややつちやるな。やんがてばばばッばあちやまつれて抜けて歸る。地抜けて戻ると心はいへど詞には。ぬ、ぬんとばかりにてスエテ涙は聲に先立てる。地舌も廻らぬ顔から何と狼狽へ來たとは。詞三界にたつた一人の母今を限りといふ文に。狼狽ゆるが不思議か。夫の狼狽ゆる文書きしは何者に頼まれた。地サア誰に頼まれたといへども更に覺えなければ恨め、けに。夫の顔に指ざしし。ウ、ウ嘘わいのと泣き沈む。詞ヲ、嘘か誠か其の文爰に懐中せり。地汝が手跡是見よと投げ出せば。さつと披き見れば我が手跡。詞カカカ、、、悲しやコッ此の手が腐ろ。カッ書きはせねども筆々フウ筆は私が筆と。地繰返し〳〵よく〳〵見て。詞ソ、そでない〳〵ニィニ、似せた似せ腐つた。似せ居つた奴窄鑿して。地生けて置かぬと走り入るをこりやまて阿呆者。詞窄鑿とは誰を窄鑿。元來似せらるゝが汝が過り。物を似せるに手本がなくて似せらるか。總じて敵の國へ入る時は擧動にも氣を付け。一言半句の詞をも慎み。油斷せぬこそ男も女も武士の心掛け。唐土蜀の單富が古事など。常常に聞きながらうか〳〵と書きちらす故に似せられ。跡で窄鑿恨みいふ程恥の恥。地エ、無念や一生敵の計略に乘せられぬ晴

幸。母といふ字に心眩み敵國へ踏み込みしは。汝が筆先不覺を取らせし。それでも山本勘介が女房とばし思ふかと。がはと蹴付けはつたと睨む片目の光り。月日と星の三光の一度に照すかと身に徹へ　スエチわつと叫び入りけるが。地アヽアヽあさましきは不具者の身。クウヽ國を離れて今日の日まで。ユヽ夢にもコツ心休めず油斷とてはナアなけれどもさすがチン女子どしセヽセン煎じ茶の夕暮雨の夜のツヽヽヽ徒然度度に琴もヒヤ彈かれず筆先の物語。ホウ反古を誰か拾ひ集めて手本とはナヽヽヽなしけるぞやシイ七年先のクワツ懷姙五月目に小產し。チヽ血の騷ぎに舌縮まり。ムウヽ生れもつかぬ吃りとなりフウ筆を舌にて物いひし。チウチヽ思へば身の敵是が癒る物ならば。クヽヽヽヽヽ口側をキツ切裂き。シヽ舌の根をヒツ引き出してもせめて死ざまに。彌陀の六字の名號を。マヽヽヽマン〳〵まんろくにトヽヽヽヽ唱へて死にたいと掻き口說き身を悔み。廻らぬ舌に急きかけ〳〵繰りかけて吃らぬ。物は涙なり。地不具者を悔む身につまされ。天魔を欺く勘介もフシ不便彌增し涙ぐみ。地先年の小產より吃りとてそれぞ天命誰をか恨みん。詞我も猪の雛より五體不具になりたれど。畜生に恨みなく魂は元の勘介。おことも吃りに心を屈せず。始めの根性を確かと据ゑ誠晴幸が妻ならば。地勝手は知つたり奥に入り母に知らせ盜み出せ。我は裏の塀を乘り易々と退くべきがおことは何と。詞ソウソヽツそれでは此方の。ニョニョン女房か。おんでもない事七生迄も女房女房。ハアヽ〳〵カヽヽヽヽヽ忝い。カカヽヽヽヽツ地畏つたと駈け入る今のかゝ〳〵は。フシ世界の鳴の手本なり。サア地心安し賢うぞ更めぬ旅出立ちと。勇みて出づる透垣の蔭人聲して。詞勘介歸すな無體に歸らば討ちとめよと。十文字の槍先照る日に輝き猛いたり。地ヤ蜂に螫まれ益な

いと事と。庭にひらりゝドりしも路次の木履片足。短き左に確かと穿き。跛に繼して兩足揃への高低なし。一つの目玉に八方見廻し立つたる所に。後を取り切る片鎌槍向ふよりは十文字。前後一度に突出せばまつかせと開く四すの身。詞槍と槍とがかつしと當つて結んだり。ためらふ間もなくたぐり引き又突きかくる上下の穗先。下段に來るを木履の齒にてはつしと踏み止め。地上段に突く潮頸もと右手を伸べて確かと取れば。取られじ物と堪ゆるを兩手を掛けてヤアぐつと引奪り。石突を押取り延べ二人が頭ばた〳〵〳〵。したゝかに叩付けられ槍を捨てて走込む。詞組んで留めんと無刀の男。大手を擴け飛びかゝる。脇の下を掻潛り太股攫んでどうと打付け。腰骨踏まへて小膝を突けば。地間も陳もなく七八人左右より組みかゝる。左手に擔いて右手に投越し。右手に擔いで左手へ投越し引擔ぎ〳〵。筋斗打たする手利の早業。敷かれし男も肩

息にてフシ一度にどつとぞ逃散つたる。幽エ無用の蹄費し信玄公の旗下にて。討死する迄二人の主を取り。外の祿は喰はぬ勘介。地駆走しつ手込めにしつ。拠々揃はぬ人の心の照降りやと。フシ木履片足で追駈け行く。地實綱城より駈戻り。南無三寶はや歸りしか曲もなし勘介。詞當國に足を留めて貰ひたき主人の懇望。甲斐の國ばかりに月日の光あるでもなし。片意地も能い加減。地是非に歸らば此の實綱が首腰に付けてお歸りやれと。限々尋ね呼びかけ慕ひ出でにけり。奥にはためく太刀音嫂小姑。互に白刃引そめば。詞恨めしいお誇殿。和女の似せ文して兄様を呼び寄せん爲。書き捨ての反古を集め。女子どもにも隠し忍び手習ひし。幾瀬の心盡しは夫に手柄させたいばつかり。地兄様こそ武士の我強くとも。傍から和ぎ入れ。緣者一門睦じうするが妻たる者の道。折角呼び寄せた母様迄奪うて歸らうとや。兄様ばかりか唐衣が爲にも母。此の首は遣つても母様は遣るまいが。見事連れて歸るか。詞エ、キウ聞えぬカッ唐衣。ド、ヽヽヽ、吃りの女アナ〳〵〳〵侮つてよう似せ文シイしたな。ナ、涙が溢れてクウ〳〵口惜しい悲しい。預きやつて來たハ、ッ母ちやま。ノ、ンのめ〳〵とスッ〳〵スッ〳〵捨てては歸らぬ。ナ、名殘り惜く首に地なつてお供せいと。はたと切るを請け流し打てば外し開けば切る。互に命を塵とも灰とも吃らぬ太刀筋雲らぬ刄。鍔音響く物見の亭。障子をさつと明けて出でたる老母の顔面。詞母様止めて下さるなと聖を掛くれば。ヲ、止めぬ出來す〳〵。切結んだ其の太刀兩方引くな動くなと。いふより早く眞逆様我が身を二つの刄の上。兩の肋を貫かれ。背骨へ二本の切先はフシ朱に染みてぞ顯はるゝ。地ハア、是はとばかり嫁娘逸方にくれて泣き叫び。家中の騒動勘介直江も取つて返し。輝虎も聞きかけ裸背馬にて駈付け詰ひ。詞仔細ある敵國の大事の客人殊に老女。我が國にての落命他國の聞え。地雖儀至極と大きに騒ぎ見え給へば。勘介涙にくれながら。詞武田信玄の家臣山本勘介といふ子を持ち。何か述懐御不足但し人に御恨みばし候か。地エ、いひがひなき御最期と。スエテ手負に力を付けければ。顔振上げて我が子とも覺えぬ事をいふよな。詞人に恨みあるなれば其の人と刺違へ死ぬる迄。述懐を相手にして命を果す婆ではない。疾くに自からは輝虎公のお手討に逢ふ身の。存らへしは命の外。一國の大將の手を突き敬ひ御配膳。足に掛けて蹴散らせし。其の時の怒りの顔思へば能くも堪忍はし給ひし。地食は人の天なれば下人下女の据ゆるにも。膳に向へば禮儀あり法に背く慮外婆。車裂牛裂にもとさぞ無念御腹立。何時の世に忘れフシ給ふべき。地お心に從はずふり切り歸る勘介。追手を掛けて搦め捕られ。母めが憎しみ此の時と。逆磔にも行はれ弄り殺しと聞くなら

信州川中島合戦

ば。此の度母が死なぬ悔みは如何ばかり。詞坊主憎さに袈裟まで憎き世の譬喩。地唐衣迄如何なる憂目に逢ふべきと。思へば胸を裂く如く思ひ歎いて此の死樣。何に似たぞ能く見よや。磔の罪科人嫁娘の錆刀は。輝虎公のお仕置の大身の鎗。貫ぬかれ死するからは憎しみは是迄。勘介を悲なく本國へ歸し給はれとフシ執り成し。頼む直江殿。地扨も〳〵如何に不定世界とて。斯くも定めなき物よ。母が生れは尾張の國駿河の國にて人となり。三河の國へ嫁入して信濃の國に浪人住居。今甲斐の國に主取りし。爰ぞ我が露の身の置所往生所と定めしに。思ひもよらぬ越後の國の土となる斯く定めなき人界は。彌陀の淨土も覺束なやと清き眼にはら〳〵涙。堪へかねて嫁娘わつと歎き伏しければ。地勘介心も目も眩み。獅子王の如き輝虎も。包むに餘る落涙にフシ目を數瞬いて在せしが。地堪りかねて大音上げ。詞ア、敢なや是非もなや。地我も人も武士の身は打見ばかり美々しく。はかなき物の上はなし。詞あの婆が一命を義理に捨てしも。地武家の名を惜む不便さよ。唯といひて魚を取る鳥あり。詞野鷹是に番ひ唯腹の鷹の子は。成長の後必ず母の業を繼ぎ。淵に躍る鯉を取る。地侍も其の如く胤腹揃ふは少なきに。天晴勘介が母なりし惜しや非業の死をさせ。方々が哀れを見る事も輝虎故とばかりにて。さしも我強き大將のスエチそゞろに袖をぞ絞らるゝ。地ヤア何をかな追善と。指添拔いて左の手に髻掴み。元結際よりふつつと切り。詞家の弓矢は捨てずとも姿は發心。名をも今日より改め輝虎入道謙信。切つたる髪は佛にも捧げず。出家の手にも渡すまじ。勘介に取らする謙信が首取つたる心。地是ぞ母の香奠今はの心悅ばせよ。武士の武邊は珍しからず。汝が孝行を感じ入つての フシ餘りぞやと涙に。くれて賜びければ。ハア、ハア有難きお情と廣緣に平伏して。涙肌骨を搾りしが。詞御心に隨はぬ恨みを捨て重々の御懸情。申上げん詞もなし。地形と心は信立に仕へ御陣に向ひ。鏑矢は射掛け申すとも切ての御恩報じ。頭ばかりは御法體の御供と。同じく指添するりと抜き 髻掴んでずつかと切り。サア今日より山本勘介入道道鬼。道は道といふ字にて母を導く菩提の道。鬼は鬼と讀む字にて鬼神も挫ぐ道鬼入道。親の冥途の餞別と二つの髻を手に持たせ。血に塗れし膝の上。額を付けて忍び泣き。母は苦しき。目を開き。地生れ落ちて此の年迄六ケ國を歴巡り。遂に住所定まらず丁度七十二年目に。西方安樂國と永き住所定め。此の二總の切髪は瓔珞華鬘幡天蓋。住家を飾る樂しやな。詞大將にお暇とは恐れあり。地嫁よ娘よ舅よ子よさらば〳〵南無阿彌陀と。兩の手に二腰の刀を抜けば死出の旅。橋に乘らねど道急ぐ フシ越路の雪と消えにけり。地人々はつとばかりにて泣く〳〵死骸に打掛くる。唐衣お勝は搔きくれて。絶

え入り消え入り亂るれど亂れぬ武士の殘。歎きは盡きず詞は盡きて互に目禮貌禮は。直江夫婦が淚の種勘介夫婦が別れて歸る。姿に謙信衰れを增し。詞ヤレ待て暫し母が追善。信玄へ土產せん。聞けば信濃の村上が甲斐一國の鹽止めして。人民士卒を惱ましし鹽攻めにすると聞く。さもしし卑怯なり。謙信が軍は鉾先鹽攻めなんどの勝負はせず。地我が越後には海あり甲斐の。一國の鹽に事缺かせず馬車にて續くべし。軍兵の精力堅くして。我と合戰せられよと信玄に傳へよ。ハツア重ね〳〵情ある詞のしほに身の歎き。涙滿ちくるばかりにて御暇申す武士の。情は情仇は仇胸を二つに押し隔て。横をりふせる甲斐がねの弱身を見せじと包めども。枯れてかひなき柞原。薩を離れて別れ路は跡に。引かるゝ足弱車。片輪車や廻らぬ舌のドヽヽ吃りが盡きせぬ名殘。筆に書かれず謠はれず泣いつ。叫んづ足もどもる身もどもる。歩み。兼ぬれば力を付け。引立て引かれてコヽコヽヽヽツ心を殘してカヽカヽカヽン。歸りけり。

第四

歌秋の山。紅葉の床に。牡鹿の寢たよ。しをらしや。合ノ手經緯に露霜織りし。錦は山の。楓葉。合ノ手楓葉のナホス流るゝ川を歌渡らば。錦中絶えんエイソリヤ。牡鹿の。渡らば中絶えん。江戸地紅錦繡の秋の色。白根が籠の並木の紅葉。落ち來る鹿を射止めんと。心も猛き武士の。矢叫びの聲響き入る天目山の。フシ森の蔭。地高坂彈正原五郎。左右に別れ白木の弓に尖り矢番ひ狩廻す。信玄高殿の簾押遣り屹と見給ひ。詞ヤアけしからず。餘人の殺生をも誡むべき身を以つて放逸千萬。我が軍法工夫の此の高殿を建てん爲。當山を切開かせしに。山神の祟り天狗の障碍。狐狸の禍。天目山の變化化物と。一國他國恐れし故。地我山神を祈り當山殺生禁制の誓を立て。一千首の和歌を詠ぜしかば。誠に和歌は天地を動かし。鬼神も感ずる威德にて。山神の忿も解け變化の祟りも鎭つて。詞高殿を始め休所まで悉く成就し。春の花の旦秋の紅葉に心を澄まし。地軍法の工風に紛るゝ方なく。思ひを凝らす所何ぞや弓矢を帶し。詞鹿を射んとは我が詞を輕しむるか。山神の祟り恐れずかさなくとも子を思ひ。妻戀ひかねて奥山に。紅葉踏み分け鳴く鹿の。地心は衰れと フシ思はずや。地武士も物の情知る。後日をきつと慎めよと。弓矢に猛き信玄公。心解けたる顏ばせも。則ち フシ和歌の德ならん。地高坂彈正昌信。御前近くさん候。詞我々御禁制を背き。鹿の子一つも射止むべき心底に候はず。態と君の御咎めに預り。それを序に勝頼公の。御不興申し開かん爲の手段。子を思ふ鹿の哀れをも知し召され。地男女の中を和ぐる和歌に御身を染めながら。掛替もなき若君を二年の御不興。痛はしや勝頼公。長尾武田は日月の如き中なりしに。詞數ケ度の闘諍我が不行

跡より事起り。兩國の騷動民の歎き先非を悔いての御慈歎と。地密かに傳へ承る。一旦の誤りは御若氣。申さばあるまじき道にもあらず。家中の歎き勝頼公の御不興御免あり。姫君を呼びとり給へば兩國の悅び。科は臣等に免じ給ひ。御不興御免下さるべしと。額を土にすり付け〳〵申せども。聞かぬ顔して返答なく。紅葉の槍打眺め フシ空うそ。ぶいて在します。地原五郎昌俊進出で。詞御不興の元は密通の憎しみ。餘所迄もなく御先祖新羅三郎義光殿。權の平太景成が娘に密通の不行跡。世擧つて存じの所。密通を強く禁め給はゞ。御先祖義光殿の御子孫は君を始め。人中へ面が出されうか。地免すとの御諚承らぬ其の内は。一寸も髮を動かじと廣言過言の大音上ぐ。信玄くわつと御色變り。詞チヽ能き事ならば新羅三郎を手本にすべし。如何に先祖なればとて。惡事を定規に勝頼が。不興免せとは不道なり昌俊。立ち去れやつと御機嫌損じ。地高殿を下り給へば二人もはつと差俯向き。詞なく〳〵立ち歸る。地扨は彼等は不孝の子は惠みある。父も養はずといふ本文を知らざりし。山神を祀る清めの高殿。諸々の不淨聞かずといふ。大事の耳を穢せしよな。いで耳洗ひ清めんと瀧の。流れに三重歌水を汲みやらばヨウヽヤ〳〵小川で汲みやれ。小川小石川轉び合うて轉び〳〵。轉びかゝるトヨエ。ナホス風の笛フシ吹きよせて。魚も錦の下潛る。向ふの川岸を傳ひ來る。賤の女子の玉揮。肩に鹽を置手試の。山下水を汲んで洗をよの。住吉の。フシ住吉の。久しき松を洗ひしは。岸に寄せ來る白波の颯とかけてや洗ふらん。歌衣が白めばお色が黑むとよの〳〵。手まづ遮る紅葉ばの。流れに衣を濯がんと〳〵。自ノ手花色衣の袂には梅の香ひや。フシ流るらん。水に亂れて戀草の。干せども乾く隙もなき。スエテ我には辛き月日やと フシ憂世を。卿ち憩らへば。ツレフシ同じ思ひを。打乘せて。草苅る籠の二つ女字牛の角文字直な文字。綱手苅手の千早原招く薄を呼ぶかとて。髮に憧れて來る賤の人目を忍ぶ頰冠り。互に顔を見つ見られ。シテヤア勝頼樣何時の間に。寵れし姿フシおいどしや。ツレ詞懷しや衞門の姫。昔の面影なきぞとよ。地苦勞召さるゝ悲しやと共に萎るゝ涙の袖。絞らば フシ淵となりぬべし。シテ詞我も高坂昌俊が計らひにて。此の頃髮に隱れ住み。稀の逢瀨に此の日數。地積りし憂さの山々をせめて語らん其の橋を。渡りて髮へと招けども。ツレ詞アヽ愚かなり此の橋の其方は父の御領ぞや。免されもなく押し付けて。土を踏まんも天地の恐れ忌はしし〳〵。シテ地なう此の國の土も木も主は君より誰あらん。我ゆゑつらき忍路の御痛はしや情なや。自らそれへと打渡す橋に臨めば。ツレアヽ暫く。隣な渡りそ渡るとも逢ふ事難き其の神の。誓ひに背くも天地の恐れ。シテ扨は渡るも及びなき目に見ぬ天の

架橋は。音になりとも聞き渡る。 本フシ義理に憂身を。からまされ心を。繋ぐ葛城や。久米の岩橋中々に。夜の渡りも叶はねば。顔見るばかりの フシ夫婦かや。ツレ詞我とても其の心。地傳へ聞く遊子伯陽は月に誓つて契りを込め。二つ夫婦の星となり今七夕と世の中に。文月七日の私語變らぬ中を頼みにて。末の逢瀬を待ち給へ。 シテフシ實に折からに。君が牽く牛の綱手のとり姿は。彼の牽牛の姿よなう。其方は織姫此の橋は。二人が中の烏鵲の橋 詞歌と渡る。風に山々の秋を。吹き越す紅葉の橋 ツレ流れは如何に。 シテ天の川。年に一度の語合は絶えせぬ中と聞く物を。我はそれには引替へて去年も今年も打解けて。寝る夜なければ物いはず又來る年も如何ならん。顔むは父の御不興の免しは何時を限りぞと。二人はかつぱと平伏して聲も。惜まず。泣き居たる。ツレ地折節瀧の水上に集る烏の羽打つ音。振り返り見給へば。瀧本に座を占めて耳洗ふ人の後影。疑ひもなき父信玄飛び立つ心の戀しさも。跡に引かるゝ恐ろしさ。牛に負はせし大小確かと脇挟み。牛を橋に追ひやり〳〵。(詞せめて其方は此の牛牽いて草刈る體にて父に近付き。地御不興御免の御願ひ叶はぬ迄も念晴らし。我と一所にあるぞとは見付けられても葦垣の。隔てぬ中も心から暫しは忍ぶ賤が家の フシ内に。見隱れ入り給ふ。 シテ地信玄四方をきつと見晴らし。あら面白の瀧津瀬や。詞夏三伏の暑を流し來る人稀に奥山の。地岩垣紅葉染め亂れ錦裁ち切る心地して。罍れなき身の罍れには天晴住むべき山路よな。さるにても物に遮る眼の前。姫は夫の縁に牽く。牛の手綱を懸繰りて傍近く。詞なう物申さん。枯木を枕苦衣。流れに口を嗽ぐとは火宅を出でし沙門の境界。正しく弓矢取るお身の。何故耳を洗はせ給ふ訳しさよと咎むれば。ツレ地流れに口を嗽ぐム、優しき女の理窟かな。耳の穢れを洗ひし水なれば。牛にかはんも穢れぞと折角寄る瀬の綱手縄。しやんとたぐりて立歸る。女性暫しと呼び止め。然らば我も不審あり。地穢れを洗ひし水なれば牛にかはじと引き歸るは。昔の巢父許由にもあらず。さもあれ如何なる人やらん心ゆかしと問ひ給へば。申し上ぐるも恥かしながら我は長尾謙信が娘衛門の姫。勝頼樣と自ら親の許さぬ戀ゆゑに。父と父とは合戰。餘所に聞きなし添はれずと二年このかた引き別れ。今日迄面を合せず痛はしや勝頼樣。詞父上御一人此の深山に引籠り在します。若し雜兵なんどの忍び入り御過ちも氣遣はしく。すはといはゞ駆け隔て切拂はんと。地同じく山蔭に身を忍べども。川より南は父の領分。勘當の身にて父の御領の土を踏むを恐れなりと。川を隔ててお物語聞くも見るも痛はしや。昔の興免せとの理非辨へぬ人の詞。聞いたる耳の穢れを。此の瀧に洗ひしが不思議なるか。地實に御耳の穢れを洗ひし水なれば。牛にかはんも穢れぞと折角寄る瀬の綱手縄。しやんとたぐりて立歸る。女性暫しと呼び止め。然らば我も不審あり。地穢れを洗ひし水なれば牛にかはじと引き歸るは。昔の巢父許由にもあらず。さもあれ如何なる人やらん心ゆかしと問ひ給へば。申し上ぐるも恥かしながら我は長尾謙信が娘衛門の姫。勝頼樣と自ら親の許さぬ戀ゆゑに。父と父とは合戰。餘所に聞きなし添はれずと二年このかた引き別れ。今日迄面を合せず痛はしや勝頼樣。詞父上御一人此の深山に引籠り在します。若し雜兵なんどの忍び入り御過ちも氣遣はしく。すはといはゞ駆け隔て切拂はんと。地同じく山蔭に身を忍べども。川より南は父の領分。勘當の身にて父の御領の土を踏むを恐れなりと。川を隔ててお物語聞くも見るも痛はしや。昔の

袖の花紅葉今は浮世の塵芥。衰へも自ら故今生のお情親子の慈悲。御勘當許されば笛による鹿火に入る蟲。夫故死する自らが命一つは惜しからずと。飜るゝ涙落瀧津水の。白玉數添へり。詞何謙信の娘とや。身を捨てて勝頼が不興の訴訟は。地優しやしをらしや。さりながら彼に向ひて勘當といふ詞を出さねば。今許すべき詞もなく。詞何か感じて許すべき程の規模もなし。勝頼が事は兎も角も。御身の事は信玄何とも見捨て難し。村上左衛門義清が甲斐一國の鹽止めして。我が軍中鹽に盡き力を失ふ所。敵ながらも謙信の懇情。勘介入道鬼が孝心を美賞し。數百駄の鹽を贈られし心入れ古今獨歩の弓馬の達人。信玄何を以て恩報ずべき所を知らず。せめておことの身の上。我が身に代へて申し開くべし。地先づ此の所に足を止められよ聊か麁略を存ぜずと。裘なき詞に愈君も。扨は夫の勘當も御免ある端相と。晦日の夜に滿月見付けし如くにて。慣ひの。暮早く。山と山との中空に。入る日は暗く出る月の。ハヅミ影をも待たず。ッし枝々に。光揭ぐる燈籠は。夜見よとてやフシ照すらん。あれなう見給へ山々の。梢々を吹き閉ぢてちり〳〵ばつと。誘ふ嵐に亂れ亂るゝ楓葉は。錦織るてふ山姫の絲のほつしと。疑はれ錦上に花を敷く。老も若きも一時の愁を拂ふ夕景色。見て慰まん此方へと休み。所に入り給ふ。ヨロ一セイ時に更け行く夜嵐の。梢を鳴らす谷蔭より。頭に輝く輪燈を戴き。詞身に千草の葉衣を重ね。歩み來る足は大地を離れ。古木の枝の四方を拂ひ。化したる姿の恐ろしや。地勝頼きつと見御身を固め物蔭傳ひに忍び寄る。化生すはと尻目に睨み。付けつ戻しつ踏み轟かす。コハリ眞砂絞りの小笹原さらさらどう〳〵ぐわら〳〵〳〵。蹴立て踏み割り高殿目掛け駈け登る。ナホス登しは立てじと。聲を掛けてむんずと組むを事ともせず。一振振つて勝頼の頭を掴んで上らんとす。ヤアやはか汝に負くべきかと。掴まれながら化生の眞中。突けども〳〵身を開き。廣に離れば五體を外しヲン〳〵〳〵と呻り聲。微塵になさんと弓杖三杖ばかりぞ投げ付くる。勝頼宙にてひらりと返し又飛びかゝり確かと抱く。山も響く大音聲。詞丸よ天地開闢猿田彦の昔より此の天目山を住家とす。地腕立てして後日に榮り受くるな立ちされやつと呼ばはつたり。勝頼かつら〳〵と笑ひ。猿丑でも猫田でも組留めらるゝは紛者。サア神通で消ゆるか。我が人力で打殺すか手際を見んと締め付けられ。あがく變化を引擔ぎ大地にうんとのめりを打たせ。投げ付けらるゝ拍子に連れ。頭の輪燈木の葉の衣。亂れて落つれば忽ちに。村上左衛門義清が誠の姿大音上げ。詞天目山に變化ありとの世上の風聞幸ひに。山の神の姿に似せ信玄を討ち取らんと巧みしに。本意を達せぬ無念々々。地爻めが冥途の先

駈せよと面も振らず切つてかゝる。心得たりと、抜合せ一足去らぬ劍の刄音。姫君聞きつけ。アレ麓に勝頼様義清様と危なや〳〵と呼ばはる聲。高坂彈正原五郎。躍り出づれば信玄公構ふな〳〵。行かば一所に勘當そと。いはれてはつと歯切し。ッシ麓を睨んで控へたり。地勝頼の打つ太刀義清が右手の肩先胸板かけて切り付くれば。うんと仰向に反りながら勝頼の高股殘り切り。兩方手は負ふ總身は血汐紅深き秋の葉の。紅葉を散らして三重〳〵切り結ぶ。ッシあるにもあらず。地衛門姫麓を下りに駈け下るれば。加勢と見るより村上左衛門心どまくれ方角忘れ。高殿さして逃上れば續いて上る山の原。小石に滑り蹈みくちらし草をたぐり木の根に取りつき。登む月影を知邊にて。遁さじやらじを力聲。跡を慕うて三重〳〵攀登る。地下には姫君身を冷し。上にはむんづと引組んで上になり下になり。起きつ轉びつ捻合ひしがはづみを打つて高殿より。遙かの麓へころ〳〵〳〵轉び離れて。村上義清橋を渡つて逃か延びんと。心は逸れど身は勞る。歩む小橋の目にちろ〳〵。半ば渡るを姫君勝頼橋の木口を手々に掴みゐいや〳〵とはね退せば。ッシ川へだんぶとはね込んだり。地續いて勝頼かつぱと飛び込み。流れに随ひ水に連れ。跡を求めて三重〳〵追駈くる。地義清も命からゞ〳〵。難なく向ふ岸游ぎ着き又逃げ出づるを。逃がしも立てず取つて引敷き首ふつつと掻き落し。詞村上左衛門討義清を。武出勝頼打取つたりと呼ばはり給へば。地父信玄思はずすつくと立ち上り。出來した〳〵それこそ我が子不興許すと宣へば。各はつと土に平伏し有難涙悦び涙。目に見ぬ鬼神の仇祟りも心に呑み込む天目山。甲斐の白根の動きなく猛く勇める武士の。心和らぎ楓葉の錦に。包む親子の中。男女の語らひも。皆此の道より情知る。千首の歌の御威德。かの貫之が言の葉を仰ぎて。今も感じける。

第五

地百度戰つて百度勝つは戰の戰ならざる物といへり。武田信玄長尾謙信四度の戰ひ牛角にて。既に永祿四年九月十日。五ヶ度の戰劍の刄音天に轟き。人馬の斷き大地を穿ち勝負を一擧に定めんと。川中島の南北を限り西條山は長尾の陣所。雨の宮は武田の備へッシ信玄。床几に著き給へば。詞族本の左備へ高坂彈正昌信。右備へ原五郎昌俊衆を計つて控へたり。詞物見の軍將染田三郎鎧に射付の矢を負ひ掛け。息を切つて馳着け。謙信が族本板垣兵衛に切崩され。繰引に引退く。地後陣の大勢を以て取圍み給はば。討ち取るは案の内急ぎ御勢を指向けられ。然るべからんと告げ知らせッシ又陣中へ立歸る。地信玄ちつとも聞き入れ給はず。詞いや〳〵武勇の譽信脆く引くべき樣なし。車懸りとて先手より繰り引きに引き。族本と族本行合ふ樣に備へしは謙信が家の軍法。地重ねての物見を待ち動くな〳〵と宣ふ所へ。遠見の士卒息つぎ敢はず。詞敵筑摩川を夜の内に渡り。貝津の城の通路を取り切り赤坂山に兵を伏せ。地思ひも寄らぬ横槍に板垣三郎穴山主膳。討死なりと申上ぐる。詞さればこそ思ふに違はず。貝津の味方は敵の後を取切らざるか。族の手見ずやと宣ふ所へ。地貝津に置かれし伏勢の兵立ち歸り。詞原隼人介正國謙信の後を固み。志田源四郎大河駿河を討取り。板垣兵衛と心を合せ前後より挟んで切り立て〳〵。謙信は犀川を渡つて行方なく。軍は味方の御勝なりと申し上ぐれば。地信

立圍扇打振り〳〵此の勢ひを失ふべからず。時刻移すな昌信昌俊。急げ〳〵と宣へば。高坂彈正原五郎諸卒を引具し馬引寄せ　ませ駈出す　フシ思ひもよらぬ。　地旭陰より長尾謙信是にあり。見參やつと呼ばはる勢ひ雲に羽を伸す雲雀毛の駿足。一文字に乗りかけ眞甲二つに切付くる打刀。信玄隙さず軍配團扇にはつしと受け。柴居を踏まへ床几を去らず退かば付け入る請身の勝。切り込む刀の盛々實々。謙信吳子が秘術を盡せば信玄孫子が心を練り。兩翼午角の大將々々自身の働き生死の境。フシ目覺しくも亦危し。　地拂ひ解す刀の除り。信玄の肩先三寸餘り切り下げられ。流るゝ血は廂なせども御佩刀に手も掛けず。切らば切られん面魂謙信馬を乗り放し。　詞臨したるか信玄。とても我に敵ふまじき所存ならば。甲を脱いで降參せよ　地降參せよと呼ばはる聲に。谷蔭より武田信玄是にありと走り來る扮裝。形恰好ちつとも變らぬ信玄二人。見るよりぎよつと謙信もフシ惘れて詞もなかりしが　地よし〳〵二人の中一人は似せ者。何れか誠の信玄名乘つて尊常の勝負せよとありければ。以前の信玄床几を去つて。老頭の甲かなぐれば。山本勘介入道道鬼。二人の中に涙を浮べ。　詞某御奉公に罷出づる折から老母申し聞かせしは。今甲斐越後戰ひの眞最中。汝を武田より召さるゝこと幸ひ。長尾の家臣直江山城は妹聟。緣もあり心も合せ若君姫君を御夫婦になし奉れ。互に名將々々の義を爭ひ給ふ戰ひなれば。　地兩家の武勇に假を付けぬが軍法の第一。まさかの時は一命を擲ち。御中直し奉れ。此の詞忘るゝなとくれ〴〵申し聞かせしも。今は老母が　フシ道言となる。　地よつて數ヶ度の戰ひ。　何時とても勝負は五つ〳〵に軍術を盡すといへども。　詞御中直し御緣を結ぶべき手段を失ひ。母が詞に背く悲しみ。勿體なくも信玄公の御姿に扮裝ち手向はず。　地一太刀切られしは主君の御身も恙なく。謙信の御憤を宥めん爲此の上の御憐愍。山本道鬼が首を召されし。兩家戰ひを止め給はば黄泉の母が願ひを達する悦び。生前死後の我が面目偏に願ひ奉ると。スエテ歎き入つてぞ申しける。　地謙信はつと感じ入り實に韜もしゝ優しさよ。天晴弓矢の手本ぞや。一命捨てし道鬼が願ひ反古にせんは弓箭の恐れ。信玄は兎も角も謙信が戰ひは是迄是迄姫が不興も許すべしとありければ。　詞信玄とても其の通り意趣も殘らず遺恨もなし。　地武勇も牛角軍慮も牛角。信濃一國五分々々の分取り。名を取り譽れ取りフシ弓矢も既に納まりぬ。　地道鬼が悦び大音聲。　詞武田長尾和睦相濟み。若君姫君誘ひ申せと呼ばはれば。　地直江山城大和之介高坂彈正原五郎。姫君若君御供申し。皆萬歳と悦び聲フシ聲しは鳴りも鎭らず。　地信玄の軍配團扇手に取り敢ず。今日よりは他ならずうちは〳〵と戯れて。姫君に下さるれば此の悦びも此の太刀の因緣厚き小豆長光。勝頼公へ聟引出甲斐と越後に信濃添へ。三國一ぢや親と子になりも鎭まる時津風。土も動かぬあらかぬの替り治まる大日本。地から生物木に登物。百億萬歳末掛けて。何から何まで皆繁昌萬々。歳とぞ祝ひける。